趣旨説明

荻野和彦

本日は重点領域の総括班が主催するシンポジウムにご参加頂き、ありがとうございます。シンポジウムの趣旨説明に入る前に私達にとって常に強い感銘を与えて下さった土屋教授のご冥福をお祈りしたいと思います。

本日のテーマは「地域と生態環境」です。この重点領域研究の研究計画の中で私どもが担当する「地域と生態環境」という研究班は重点領域研究の中でただひとつ自然科学的手法を持つ者と社会科学・人文学の方々がご一緒している班です。このように異った分野の研究者が一緒に集まって議論することは少なく、議論しようとして話がかみあわないと感じることが多いものです。同じ言葉を使っているのにその意味内容が違っていると感じることがしばしばあります。そこを打破すために私どもの班は人間の社会活動に興味を持っている生態学や生態学に興味を持つ人類学者をあえて組織しております。自然科学の研究領域にありながら琵琶湖の何々の問題、瀬戸内の何々、というように固有名詞がついた研究をやる必要があると主張する人がありました。そういう固有名詞のついた自然研究は彼にどうしてもこの固有名域内の人間生活に目を向けさせるということをともないます。例えば海洋工学の背景に人間活動を見つけようと努力をしてきた研究者もいます。しかし個人の努力、個人の思いつきに願っている限り思いきった成果をあげることにはなかなか結びつきません。この重点領域研究においては、自然科学者が社会科学者と対話すること、社会科学者が自然科学者と強い関係を持つことを期待すると領域代表が述べているように個々の発想が組織化されて行われなければならないという指摘は重要な意義を持ちます。

この地球上、どこをとっても生物の生活のないところはありません。生物は一つの種類、一つの個体で生きることは決してなく、必ずいくつかの種の集団、種と種の結びつきの中に生活の実態があります。そういう生物の生活のあり方に対する理解が深まれば深まるだけ、人間社会は生物の生活を基礎としているものであるという理解が深まるにつれて、自然と社会との関係を真に理解する努力が求められなければならないと思います。

自然界に生ずる事象を自然現象として捉える、あるいは社会的現象を社会的諸過程として捉えるという従来の方法にとらわれず、両者が同じ土俵の上で、同じ言葉を使って議論をしようというのが、この重点領域研究全体の趣旨であろうかと思います。私たちは地域の社会活動、現代文明が生態環境、地球の存在それ自身とどのように関連しているか、議論が盛んになることを願いながら、このシンポジウムを組織しました。

このような考えに至るにはA03班の原さんのお力添えによるものです。同様に他の研究班か

らの応援、重点領域研究に直接参加されない方々のご参加も頂いて、このシンポジウムが成り立っていることを申し上げて、趣旨説明に代えさせて頂きます。